

いちじくにおけるキボシカミキリの羽化消長

[要約] いちじくにおけるキボシカミキリ成虫の羽化は、5月下旬から始まり8月中旬で一旦終息し、9月上中旬にもわずかに認められる。羽化消長は6月上旬及び7月上中旬の二つのピークを持つ二山型で、両ピークに羽化が集中する。

生産環境研究所・病害虫部・果樹病害虫研究室					連絡先	092-924-2938	
部会名	園芸	専門	作物虫害	対象	果樹類	分類	指導

[背景・ねらい]

カミキリムシ類に強い病原性を有する昆虫病原糸状菌 *Beauveria brongniartii* は、キボシカミキリの生物的防除素材として有効である。また、本菌は不織布坦体で培養することによって圃場への施用が容易になり、病原力を約1カ月間持続させることが可能となった。キボシカミキリの産卵前期間は約10日であるので羽化直後の成虫が本菌に感染すれば、産卵する前に死亡することが期待できる。本研究では *B. brongniartii* の効果的な施用時期を把握するために、本虫の羽化消長を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

- ①キボシカミキリ幼虫が食入したいちじく枝を網箱に設置して調査したキボシカミキリ成虫の羽化期間は、3カ年とも5月下旬から8月上旬までの約2カ月半におよんだ(図1)。
- ②いちじく圃場において、脱出孔数から推定したキボシカミキリの羽化は、5月6半旬から始まり8月中旬で一旦終息したが、9月上中旬にも少数の羽化が認められた(図2)。
- ③キボシカミキリ成虫の羽化消長は6月上旬及び7月上中旬の二つのピークを持つ二山型を示した(図1、2)。

[成果の活用面・留意点]

- ①キボシカミキリに対する *B. brongniartii* の効果的な施用時期を決定するために利用できる。

[具体的データ]

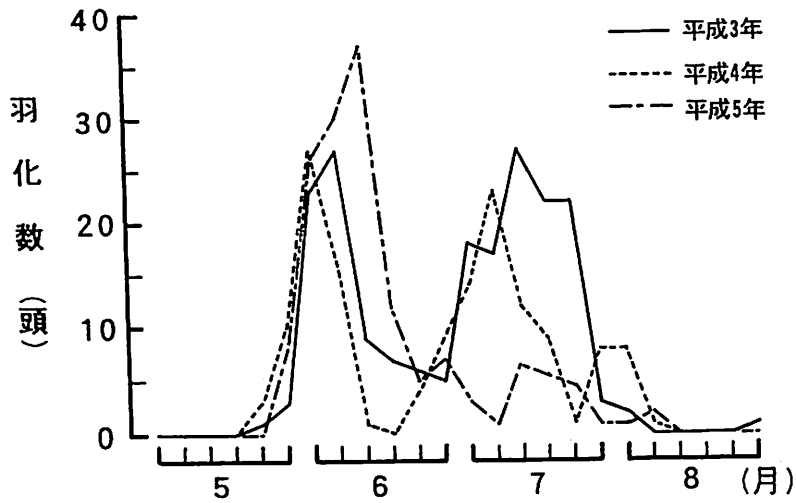


図1 いちじく枝からのキボシカミキリの羽化消長
(平成3～5年)

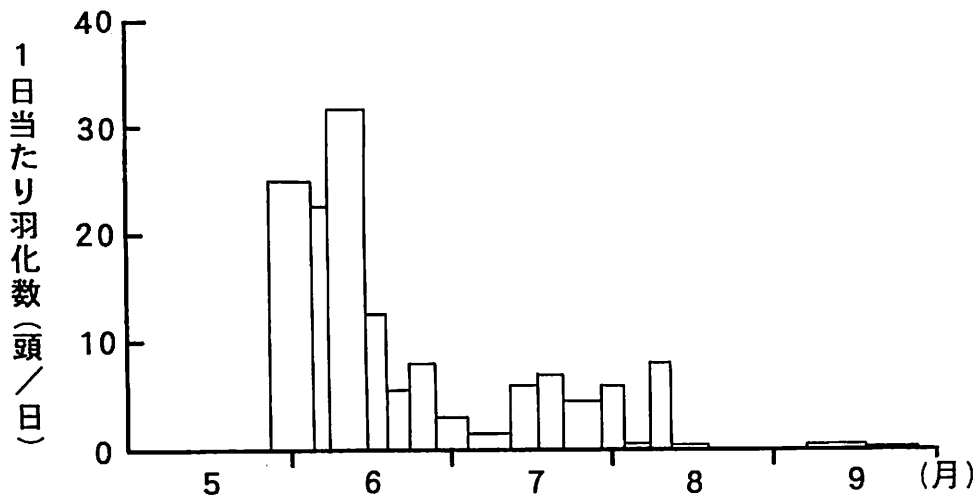


図2 圃場におけるキボシカミキリの1日当たり羽化数の推移(平成5年)

[その他]

研究課題名：カミキリムシ類の発生生態の解明

予算区分：国庫(地域重要)

研究期間：平成5年度(平成3～5年)

研究担当者：津田勝男、堤 隆文、山中正博

発表論文等：平成3～5年度生産環境研究所果樹病虫害研究室試験成績書